



エッセイ

セイタカアワダチソウ

SCA 14 期 若林 里咲

伊坂幸太郎の小説『楽園の楽園』にセイタカアワダチソウという植物が登場する。北アメリカ原産の外来種で、背丈が高く、秋に黄色い花を咲かせる植物である。この外来植物も例に漏れず日本各地で大繁殖したのだが、そのやり方が独特だ。地中に化学物質を出して他の植物の生長を抑えるのである。小説の登場人物たちは「嫌な感じだなあ」「いや、賢いんだよ」と、異なる声をあげる。どう感じるかは人それぞれだ。

とはいえ、セイタカアワダチソウはネガティブな印象を持たれることが多い。日本生態学会が指定する「日本の侵略的外来種ワースト 100」にも選ばれているほどだ。ススキなどの在来種と競合してその生育に影響を及ぼすのみならず、成長スピードがかなり速く、地下茎で繁殖するため駆除も大変である。そういう意味では、非常に厄介な植物なのだ。

こうした先入観からだろうか、この植物にはかつて濡れ衣が着せられていたことがある。花粉症の原因と誤解されていたのだ。セイタカア

ワダチソウは虫が花粉を運ぶ虫媒花なので、花粉はほとんど飛ばない。フタクサなどの風媒花とは違う。そればかりか、セイタカアワダチソウには役立つ一面すらある。葉草としてお茶や入浴剤に用いることで、デトックス効果や消炎作用が期待できるというのだ。

そんなセイタカアワダチソウの数は、実は一時期よりも減ったといわれている。どうしてか？実はその一因となっているのが、まさに他の植物の生長を抑えるために出す化学物質らしい。簡単にいえば「自滅」してしまうわけだ。ずる賢く、ちょっと嫌われ者な侵略者の運命は、意外にも皮肉なものかもしれない。

「でもさ、セイタカアワダチソウって自分の毒素で自滅しちゃうこともあるらしいよ。ちょっとかわいそうっていうか……なんかあほらしくてかわいくない？」

もし小説の一コマに入り込めるなら、そんなセリフを投げかけてみたい。

今回の科博 SCA 広報誌では、QuizKnock でご活躍中の須貝駿貴さんのインタビューを掲載しました。お話の中で特に印象的だったのは、「面白く見てもらえるコンテンツづくり」を何よりも大切にされていることです。サイエンスコミュニケーションでは、内容をより正確・精緻に伝えたいあまり情報量を増やしがちですが、それでは多くの方が楽しめる動画にはなりません。伝えたい思いをあえて抑え、内容を厳選する。その工夫は、須貝さんの個人チャンネルの動画からも伝わってきます。今後のさらなるご活躍に注目していきたいと思います。

過去のイベントの実施内容は「科博 SCAblog」をご覧ください。
<http://kahakusca.edoblog.net/>



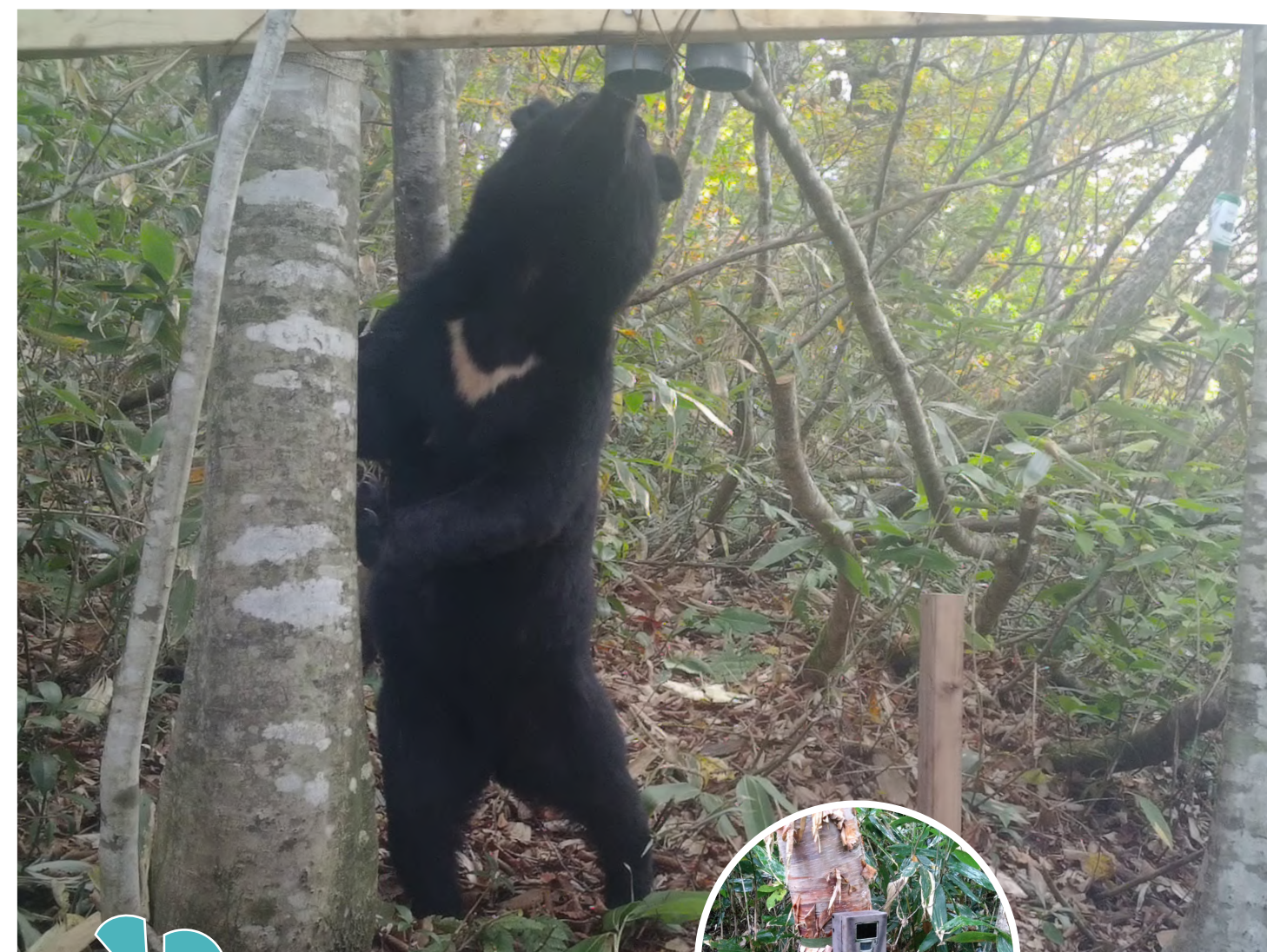
科博 SCA の広報誌

サイエンス コミュニケーター だより

Volume 20
September 2025



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）」を開講し、その修了生は 350 名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



撮影：林航平（SC 講座 11 期）

Question 表紙クイズ

この写真、何のために撮っている？

- ①胸の模様の識別
- ②身体測定
- ③人工物への破壊行動の調査

開いて
答えを
確認！

須貝駿貴 Shunki Sugai

国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター(14期)
東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、
博士(学術)。
知的エンタメ集団・QuizKnock に所属し、
YouTuber やタレントとして活動。
得意分野はバックグラウンドを活かした科学企画。



エンタメの力で、科学との距離を縮めたい

Q. 現在、どのようなお仕事をされているのですか？

A. 「科学をエンタメにする」活動を幅広く行っています。

「科学の内容を専門でない人にも楽しんでもらう」、つまり「科学をエンタメにする」ことを軸として活動しています。QuizKnock はそのひとつという位置づけです。QuizKnock では、「理科系の話題は須貝に聞けばなんかわかる」というポジションで活動しています。

科学にフォーカスした内容は個人チャンネルで行っています。簡単な実験を紹介したり、頂いた質問に「ぼくも調べてみたよ」という感じで答えるなど、先生ではなく、先輩っぽい目線を意識しています。以前、「踊りながら物理の問題を解く」という動画を出したこともあります。踊る意味は特に無いんですが(笑)、結構ウケは良かったです。流行の音楽を聴ける、好きな YouTuber のダンスが見れる、といったエンタメコンテンツの中に、科学の話を混ぜていき、気づいたら科学に詳しくなっていた……なんてことも狙っています。

Q. SC 講座を受講したきっかけを教えてください。

A. 自分の関心と会社の要請が一致したため受講しました。

QuizKnock の活動を始めた博士課程 1 年の頃から、サイエンスコミュニケーション(SC)には関心がありました。ほかのメンバーは東大クイズ研究会出身のクイズ王ばかり。でも、理科や物理の話題で

は自分のほうが詳しいこともあり、そこを活かしたいと思ったんです。

受講の直接のきっかけは、当時、QuizKnock の運営会社である株式会社 baton が教育コンテンツの可能性を模索していたことです。自分がサイエンスコミュニケーターになることで事業の可能性が広がるのではと思い、SC 講座を受講しました。

Q. 受講を通して得られたことを教えてください。

A. 「事業として SC を行う」ための考え方が得られました。

SC 講座で得られたことのひとつは、「事業として行う」という考え方です。事業には当然お金が必要で、講座ではその点のリアルな話が聞けました。例えば、私たちが企業さんの PR 動画を作る際、相手のリクエストに単に答えるだけでなく、逆にこちらから提案をすることがあります。お金と責任感のバランスの中で、どこまでこだわるか、という考え方の根幹を講座で鍛えられました。

また、講座の中で言われた「企画書は前日まで完成することはない」という言葉も印象に残っています。開催直前まで内容を徹底的に見直す姿勢は、ワークショップなどのイベント企画に役立っていますね。

Q. コンテンツを作る際に大切にしていることはなんですか？

A. 「正確性と面白さの両立」と、「リスペクトする姿勢」です。

もっとも重視しているのは、「正確性と面白さの両立」です。この両方をちゃんと大事にしたい。とはいえ、正確性を優先しすぎると説明が増え、面白さが減り、結局見てもらえません。本当はもっと詳しく正確に説明できるけれど、あえて伝える量を減らす。葛藤もありますが、まずは面白く見てもらえるものにすることを強く意識しています。

また、特に生配信のときは、相手をリスペクトする姿勢を大切にしています。例えば、科学的に怪しい話題を振られたとしても、まず話を聞く。そのほうが感情的になりにくいですし、視聴者も気分がいいですよ。相手をリスペクトして対話する姿勢が、結果的に、正しい情報を理性的に選ぶ感覚につながるとも考えています。

Q. 今後、どんなことに挑戦したいですか？

A. 動画配信を長く続けること。いずれはアカデミアとの連携も。

動画配信は今後も主軸として続けていきたいです。動画は自分で作れるところがいいんですよね。「このジジイ、いつまでおんねん」と言われるくらいまでやりたい(笑)。

もう少し大きな目標としては、アカデミアとの連携も深めていきたいです。アカデミアを広告で支えるとか、寄付金で学会を支援するといった、研究や研究者にお金が出る仕組みが必要で、多分そこにこそ SC が必要になってくる。そういうビジネスを、いつかライフワークにできればと思います。

A 表紙クイズの答え
Answer

①胸の模様の識別

これは、ツキノワグマの胸の白い模様(斑紋)を識別する調査で撮影された写真です。ツキノワグマは個体ごとに胸の斑紋が異なるため、これを「個体識別の手がかり」として利用することができます。カメラトラップで撮影された画像から、胸の模様を確認し、過去に撮影された個体と照合することで、同じ個体が再び現れたかどうかを判断できます。また、この撮影結果を使って個体数を推定する試みも実施されています。

